町人富久路

二

108
2

門 108 巻 2

町人囊巻二

或町人の老翁れいつゝい禮儀ハ町人ゝとそれ和ゝて
れゝるのちり昔乃町人ハ實儀のゝふ〻多
外のかさりすくれし今の町人ハ出〻後ゝ和て
過奢ふちり實儀うすく禮儀武家乃風を
まなぶく巍〻ゝちり町人ハまゝ質素と本こ
して外をかざ〻ル易商を本ゝて樂〻ゝ暮
とべきゝゝゝるふとゝこ〻富ゝ町人ハ身と高
ぶり人免ゝて公家武家乃禮法と似をゝく
者とゝとりの多〻ゝ様と義〻作ゝおゝ人、

ものを知らざるもひさしく似たるわるくよ絵よ
一国の風俗とあり彷いろく過義あるもの多
し禮儀乃果ハ驕るもあり驕乃果ハ非儀
とあと老子の禮ハ忠信のうすくなりて乱の
端なりとのたまひしも此をくひちるるやう
根幸禮ハ天理乃節文なれハおのまづ分
際し過てる禮法ハうれ非禮なりて驕奢
しなりのあり禮儀ちらしさへハ人も少
ぐしるまれなり禮儀ハかつまて傲と
あと者多し廣人ハ此ひとり禮と親しき

人もいひをれしものを親しハ暗るもちろ
なりといとり
或人のいとく無欲ハこれあり天理吾欲と畜生
吾欲となり天理吾欲ハ福寿の本ふし畜生
下ハ要とり畜生吾欲ハ身をわるばし家を
うしなふ町人の知べき所なりいとり
或学者のいとく倹約と吝惜とハ雖へうるたるの
なり吾ハ私欲とり出ハ倹約ハ天理とるる責絶
左衛門乃十銭と先ひく五十銭の炬松を
買てく尋得るのたぐひ是天下乃貴をいとひ

利を忘れざる倹乃道なり異国よりこの世
間あり程伊川雍華の間あり絹一貫
乃銭をもつて馬に鞍置き沽をし会よつきて
乃ふ銭をし僕夫のいつく今朝装いたりし人
あつて失いたんハ水と浮ぶ時落也ものもん
といて時に伊川をげさをいて千銭可惜と
つるものハ坐中の二人答くいつるハ一貫の
銭を失つるハさてく惜き事なれとも又一
人のいつるハ千銭ハ微き物なり何ぞ忘くとる
ものいく又二人のいく水中と囊中と

異なる事なし人失ハ人是を得る又何を
嘆うんやといつる伊川のいつく人これを得る事
あるハ失ふハ銭ハ天下国土に用ある物
なり若水中に沉るハ永く世に用ある事な
うんし吾ハ志を捨てをけくとのつるひも青
砥を捨門のつるとかいつれも其
銭を天下に乃ふ惜きこと限なものと一粒乃米一
枚の紙も無用に費しなくハ則天下に用物
を費しなくハ道理なれハ天地造化の功をそ
こなふの咎あり此志つるとを守りつとむ人ハ

若子の倹約よかなんとこいくれし

或人れいらく富て驕るこそたい易しといてもそ人
多し況や富て礼をぬる人をや富貴の門ハ冤
つふいくむしく古人もいの玉しゆこそふ富を
人い絲くおそれ慎へき事也こそれくい久しく富
貴ハ多のちがさうこそいこそや所人をや金銀
財寶と多く貯へりそなハおのまこが身のうめ也
人りおろう多ゆこそ理なし世諺よりもおさろ
寶がいれいらはゆきこそ人間寶がいれいあれのこと
いなもよれいなしゆふうそこなん

或人の曰よ豊臣関白乃沛時驕者久しのうそこと
いこ落書ありしに関白の沛遂書ハ驕らぬ者
も久しのうしとおかをくれしとやはこれ人
乃世の有ゆ聖人も盗賊も孫よハ同じ土こ
ゆ極うん事ゆれきの知りなることいへいりさん
なる人乃いこるい驕ってもし驕ってもし久しのう
ぬうきいまるとうこいハ驕らぬこそそこけも聖
人も盗賊も同しく土こかうれよ聖人こそそよ
それ人間いつまてもし不乱して善人悪人共
ゆうう久しくい驕を懲まれる人多りうんこい

ゆしもたくいうにて我
或人のいへく古語に富貴なるものハ多くハ慳なり
慳なるゆゑハ不富富なる者ハ多くハ愚也愚
小あるゆゑハ不富富なるものハ慳貪なり心
はくむこれ人なるていハ財寶ハ多く貯ふる
あさなを法にてや非義の謀計をもつて富る
ものゆゑにや富る人ハ貪き人なり却て罪
あるゆゑん五穀貨財等ハ皆人の貴ぶ所の貴り
ものゆゑいまの富る町人のたとへさして天下万民
の興ハ婦をおのゝ一人富ハ人なるゆゑん

貪者よハ此罪なし貪ハ世上の福の神といふ
あり田ハ人ハ家をはぐくみ渠ハ船を水
汲薪ハ人の生ぐひみな貪者の所作にして天
下ハ重寶是より大なる福の神ハなし此故ハ
人民の二字ハ世の人なりと訓と書經にも
民をい迫ハ近くへし下ハ民い惟邦の本
なり本固ハ邦ハ寧しといへりいまや町人無
位の身にして僅の財寶を鼻にあてて貪者を
いやしミ慢ハんやしいくもしし
或人のこ貪し富し常住なし我和の明風い人の

毋の逆風人は毋乃順風い我こゝの逆風ちう様敵
隣よりいとふまを忌い花をもれ富ぐう様しめうくうこと
つゝ方のゐして世いおゝきゝものちう富ふ人乃
財寶減ちゝ耐い貪家る財と益貪家い富ん
事と祈ゝいて日用のつゝちゝ紙おゝゝゝ紙富ふ家
い久しく財寶と持ゝん事として家業紙勤そて懈
らゝと相ゝちゝひふらゝまゝあれちう合して世間い立
ゝちうの迚金銀銭貨ハ根本天下萬民の用物
ちう一人して貯ふふゝる多き用い万民乃用
をゝとゝゝ為し此故ちう一人過分の金銀を

ちゝ為ん事紙祈ゝとゝいつゝも忙ゝと毋ゝ人一旦
千万の財寶を貯ふゝいつゝゝ永く庫中かのゝ
積為れい其金銀銭寶と成ゝ金銀は德用
ちゝ自他の重寶ゝ成事ゝ此故ちう藏の中
ふゝ徒ちう積為ゝあゝいゝと思紙勤ちう働して
富紙久しくゝゝゝん事と謀ふ其謀ちうゝ
いてふ利大損とゝちうれゝおのつゝやじ
ゝあゝいゝゝして富んゝ紙はゝしちう
自然のいきちうひちう財寶増事極ちう用い
ちれゝゝと減ゝ我財寶減ゝれい人乃財宝を

増減財宝増減ある人乃財寶減ずる乃理あり
きたる人い天地陰陽の二氣い常住普く流行
して一所ゑ久しく留滞ずる事ハ一所陰陽
一所ゑ久しく留滞ずるあり所い是氣の偏
ちらゞゆゑ人乃天地乃変異くなるこゝの也
天下の金銀もみまるゝ天下ゑ万民ゑ普く流
行して一所ゑ久しく留滞ずるあり所い又変
じていはまなく数じゆく是自然の理なるゝと
いふべしゆゑなるべし
或人のいふく禮記ゑ志い滿ずれば樂い極へり

とあり又易の豊卦ゑ日中なれい是き月盈
きゝは則食天地の盈虛与時消息といふやゝ
人ゑ却ゆてゝや況や鬼神ゑおかてゝやといふ
是等の教へとゝれゝ常住乃形ゆいとゝ
いて却ゆてゝなるゝふ松樹千年も終ゝ枯ゝ槿
花一日ゑおの住ゝゝ栄ゝ紙ゑ記ゝと語ふゝ側
ゝ金もまるゝれ翁なるゝ出ゝいふく松樹
千年も終ゝ枯ゝべしとゝあるゝの花ゝゝゝ
も世いゝゝむゝひ月湯ゝい虛ふゝて不斷ゝ
日月ゝても埒いあるゝ世ゝやゝものをゝ明ゝゝ

こゝろへしるべし扨おのれ先おのれが身をお
或人の云ふ所の願の望み成就せんこゝ
さあるこゝろを正しくもつて其の基なく
こゝ紙待べし町人の富を求むる其の基なく
して異報を待いはゆるなり楚辞に曰善は
外より不来名は虚くあるべし孰か施し
なして報いあん孰か実して獲ることあん
世話に曰網なくして測るのぞみこれあるは
こゝ種なくして穫をいはんこゝやこの謂なるべし
こゝ或人はこゝその意聖人はおしへふる同じきこゝの

なりこゝいつり
或人の云ふ木は葉天物にして人あるよ自慢せざるこゝのい
ふこゝなく人儒書ふみに満い損を招く謙い益を
受こゝれ天の道也こゝあり仏経に七慢の説のこゝ
死角自慢いこゝ慢ぐあるこゝこゝ学問才智
芸能こゝ自慢こゝるはよのつゝれる也こゝ賢き
人い其慢心をこゝく押へこゝて外にあるいさ
ぶこゝて人よ謙こゝやこゝくこゝと此ぶこゝ慢心を
きこゝぬこゝといこゝこゝ慢心こゝたまあるこゝ
心こゝく気質軽浮こゝる者い心こゝ

藏し秘するあるいは傍に詞よあらはし容よ
て人よ見せまるあるいはつくろひて己れ
るきわうるさら謙てそ内心よ驕傍ある人し
あり何にても一藝ある人いうわるを傍ある又
藝を秘てても傍ある者ある民系圖を自傍
し分別を自傍し達者を自傍し財寶を
自傍と親族自傍男自傍あるこれの幸し
ちく一文ある通ある者いと何の自傍もるあり
あるんと神ないは是し自傍あるを求不貪不
諂一分くといて自傍をこれい一分自傍を

いうを形い法分謙て内分人よ傲気象ある者
しあり是を卑下傍しいう此をぐ町人うい
らりさ多しと故郷自傍あり天竺い佛國
して唯我獨尊の大ふ此の國くい栗散國也
と自傍と唐土い聖人の出て天地の中出
禹國分一仁義の國日月星辰も此國を分
一と照し給ふて自傍と又日本い神出
世界の東よありて日輪始く照し給ふ國よ
て地靈て人神也美出一の出て金銀も
多し豊秋津國も中津國も浦安國も

つゝしみて自傷と世を國おのく自傷あり自傷よ
りて甚國の作は政道をそなうゝ又大なる自傷あり
天地乃間にまうまれいまる物多し甚間に人と貴
しとす此故に人い天地の靈と号といへり誰
も思ひとゝまりてあるべき人間まれとこれを
名付くゝ此自傷い人にて一日も欠んべ有べ
からざるもの貪賤左倉の身なりといへども
麟鳳の生れたまふ人れ人たる義を自
傷して靈物乃名を人とへうといへり但
くいつるもまた自傷ゆゝれば人にて失ふ

或人の曰氏のはるふ茄子いまゝといつるハ貌
乃上のあるこゝろにて古人よいわゆゝ人間
のうちハ十人に七八人いはく貧乏又無ゆる
ものなり但又世ゝ人ゆゝ有るも
わりまたひれ所なる遠き他人に能ゆる人も
多くあるこゝろい又無ゆる事あり是い
ゆゝるものなり容い者とも伝いもまたといへ
諸こゝて実もあれうこゝろい氣ゝうけつぎゝる
ものあれゝゆゝるべき理わり乃世わていへけ
ちんとゝうこゝろ乃多きゝこゝにはりて

ものなれいたくはなはだしくなるものも
あるいは父母賢なりてよい不肖なり父母不肖なりて
もよい賢なり悪もまた一編よいあるいはまたもと
ひくのごとし仏我蜂のごとき別の生代なりておのおの
形りを変化をなす悪人ものもまた善人ものもと
して教えない悪逆をなすものもまた行乃罪人といたる
ゆえにやさしくもまた鶯のうるものもまた中の時鳥乃
あるものもあるいは善人なりしてもまた悪いものもまた
変ずるものもあるものもあるいは武家みな神孫なるゆえ
悪いげくしろうすることもまた剛なりてよい臆なり町

人みな神民なりいかいはりいたくなりはまたまた又倹
約なりてよい驕なりまた又剛なりまたまた代なりもと
又倹なりまたまたまたのひとなりしたしいなり
ある人の物語より後醍醐天皇の賢臣藤房卿の
のあるいは末代の人いは借物をうんこと秘て
怨なるものあるものあるいはまたまた藤房卿
乃時代は乱世なりて道なる人もまたまたこと
これは借物をこいて怨なるものあるものあるひのあるもの多
もまたまた真世なるものいはんや今乃世
人をやうなる人の財宝をうばいとれるは邪正の二乃者

浪世の分際と身の分際と計りて真に所
より其縁を分別して人の財寶を假い取り
入を計りて出をとる紙をば分際よりする浪
費人にて又い過義の驕よりて真用事
不足ゆへて他の財寶を假者いこしと邪
まを入うと人をも此まをたくして當座の
利欲よりて邪心をもつて人を假い邪也
彼邪心をもつて人自他の利を計るゆへい
始より利分のらをもつけまた其人を悩ま惣意
の法にしたがつて假を者い尤正ちりしの

人い正理をもつて借用し正理紙もつて
假をしゆやはの少人り假人もこいまを多
うを見いうを假をし人も慣貪り責
をを事をうし事代よい邪弱をもつ
多人の財寶紙假事多くあるゆへい
驕のこゆ所ちくい寢ぶ法をんの為ま
をし世りゆる事をれいて世をを
假人をを又邪欲世わく又い性愛乃
定本死一信の をゆ世りあ
りをていと世をを世いりく借用を

和くしまに代へ借用と和くしまに弱よ
ゝ云ふも少かきものい借紙なり畢
竟相対の邪欲より事無ら事
ゆかしく於て世上の金紙いこと下
方氏の金紙なり一人ゆかくし先
をそれて人のくるしうこと紙おさんい聖賢
の志ろうはあるどこの乃ゆへ
まりある人の紙奥紙をさる人よ
ゆして天下の風俗を達をしいま
の代しうまれてい聖賢しつた

上事と浮どてはいかるる事あさいし若の
るあるべ骨をくぶれてし返ゝるわん世話よ
一生人の財寶とのねよくにて日夜ぶぐ紙
ゝすを結ひど是と君まれ別とて結に
ある人のいつ所はまく草いいつゝるる書也
其中に陸奥守宗時ある兵最明寺入道殿
よ呼ゝ事ゝ中にやゞて参ゝうんと返るの
なゞ貢金のおくてゝやんと延引せ秋よ
最明寺殿推参あうて金ゆのさてゝ及や
夜中ゝるれい襲ゝうあても疾ゝ事ゝれよくゆゝ和て

使ひしの小者ありしを召て直金とて多くはしふ
最明寺殿親子に土器をあたへ酒を
ひとり飲ぐんとさびしくなれば一つをあり者い
をけまい何そ勝よい有りやきん人いとれ寝
ちつまりめんとうつ居ぐてとれとあり
は紙燭をもてわらこら赤く紙しつた何と
なくて是所の柳よ小土器よ味噌のかけ
をとんなて是ぞりあてさてあてあしうい
事是めて教誡と酌て仏く興つよ入まつと
あうのまう成るものとうるれしと其時代の風俗

質素易簡の体ちうを分て観察とる小対結
ひて感涙とりとかはしたうとれ行う今の代
まはうの事と同てもそぐ何とかきしく物
語りのとひてちうを行くうと人もかし流石よ
天下とちまを居人乃其所よ何の行ちうを
人かりそれ強く義食をとりうどか土器よ
付ちう味噌して事是めして下人の労といひし
ちあそ行うか何をぐれと求め行へ仏ちうたい
由とふ優ちう有拾ちう又天下と知ちうふ
人乃門葉ちうの宣時晴蓍の真玄西特

なれども不審なるようなれども比代乃如
くに衣服も昔に変ゆ宮位ある人といえども
真玄褻晴二つ乃うち人は平打ぬくく麻布
の上に洗ひて用ひ乃うち也宮時も真新うた
晴着の真玄洗濯ありて故なくいとむ事
なくも弊物かうてあれと語り伝へ
又同じ人の乃うち今の世にてもそなへと料理物
乃そなへひよいいかへいの事とせ一名ぐひ多く
今れいの事とする物よいいかへのうた人もきに
なれし物多きうち今のぐうちと号ける

うちの禁中かうてい萩の花といひて女中かし
きこしめすとも也乃かいうちいくうを萩
乃ぐうの事也最明寺入道殿足利尊氏の
許へ鶴岡社家の須よりに立よりを給ひ附し一
枝ようらあるひ二枝ようの海を三枝よハひひらしい
そやうとはとく草にあり今の世にかう慇懃
なる客人なぐよいかうちぐいかく敬ふて
出さしあるに沙わへうり此かひひ多く又近
代い雑ようハ鴈と貴ふて人ともいかへハ鴈と
賜ふとせうや雑ようハ松茸年にハ汁湯殿の上

うりのうちにくるしく後深草院の中宮の
御方の御湯殿の上の棚より鳥の肉つるを中宮
の御方又常盤井相国御覧じてうの物とれ
ども其姿こわらはかわいきまなりといはしめ
給ひしかども日本うして雉子は上代より貴人の
調食あれども鳥は上代の人食せざりしの
ゆへ中古よりそろそろ御ゆるしあり此故實にも
て雉子よりはいまもて料理の間乃棚などよい
上さう側なり是又質素と故實とを過義の
物と是をいまもてうの風俗なり湯殿といい料

理の間など代々浴室の儀はわれらがうの
事なれども今の町人はもちろん入るべき事
にあらずはよりさまに貴人しかも
あるべきのいつかいに古今代席は黒主の歌はうの粕
身は地にいくで高人のようにさんがご
とくとあるようにきあるとは今の羽二重の類なり
貫之の時代なればよいまだ羽二重はなくしかも貴人
きものにあらざるべしいつの日野はしなどの類
をぬきあるいはりの紋をさへ高人まで
は相意なるべしちりめんや羽二重唐さんの類

そやされも今の世よい町人なへてよたさんろ
事なれ身小ちさ法みもこと言振
禄多ろ武士公家のとかさしいとかろ
ところなくそ見ゆるもおのつつ相応
せさる事ことこの武家い供人多く馬よ鎗
よしあるも多きさ法みと町人い唯一僕して
羽二重縞紬もいとこと人なたまさみて身よお
こんさ法なる武家ことみまばはく供は
又町人ことはり人へ羽二重の羽織と着さる
ろのまくとやしもこと供よろのもとこと案

へかさこと法ことはいてあたくいひて多ひる
都よかろしなる町人何ことや一生脇指をさす
事なし武人日本の風俗にて刀脇指を礼儀
とする武男の為のまよいあるしと又い若ろい
つるい礼儀はよい羽織又い袴を着ること秘り
法ことろ礼儀なし武士い武道を常にまこと
が役なり此故ろ人ことと更にて丸腰なるい武
士の武と忘れるになる故ろ礼儀なりとこと
町人へ是よ異なり何そ一代よ一度も用よ
ことはるまなる道具を常に帯して一生乃

同窮屈とゝんや唐人の千里万里の旅行よ
り丸腰なりとゝくとも絶て患よ吟まゝ
を空を活くゝる市代のかゝけるた一徳よ
扇子一本ていつゝさゆ易ものをやゝて
く丸腰なるとし思ひ程よ道理の埒ハ明ゝる
き物なれバ世ゝて町人ハ絶き脇指ゝ帯ゝ大
脇指をハやゝたりのたり武士の仰をあきん
ゝ長ハ町人ゝて無安ゝ
ハ代の分別とゝ人ゝ多ゝ
ある富限なる町人の子波唐の天神を信仰

して家内ゝ安置し毎日の拜礼ゝの備へ
物おゝゝ事ハし長ハ思ひゝひをして
いゝハや世のまゝ人ハ
ゝ唐ハ此ゝハ天神と称ゝ
しゝゝ陸ゝ親先祖の功業よりて今日
子孫安楽なるハさしゝ及ゝ
いゝゝ仏神の御恩ゝ
のまゝハ長者のまゝハ
ハ親先祖長身ハ艱苦ゝ子孫ゝ多
くゝ財寶をゆゝゝ思ハ方ハ

後よいあり次唐土にて親先祖八幡宮恵比寿と則こと地
乃神明一體にして堅固にしてこれあるこ
いつぶんあるべし
武人のいつかい豊年にて八木下直なれい武家困
窮あり故に世間商賣なくて町人のあみて医
師にいつかいつかいつかの道理にやしいて不審
出来にて八木高直なり故に民飢死せしまい
あるべきなべてなるべしいまこそ八木の直ゆと
くて商賣とくなる故に飢死なるべきいつ紙
ゆめゆめ世間衣食のそなえなる者乃千

紙より飽満なんて紙移りして常に貧窮する民
のくるしみ紙なるべきの也あるしい富の町人の
世代後るべきなれいつとても安なれも金銀れ
頼ざる事と歎くべき商賣して金銀と用をく
貯へんとなるべあり異富富紙かさ移人とする
乃大欲不仁なるもの也町人なる者此念とおこ
し紙入をけるして出と事とせば用不足と
いつるあるべ用不足なるべい大欲の移りい何と生
ぜる事あんやいくべ紙

町人囊巻二終